

令和三年度入学試験問題 国語（五十分）

二月三日 実施

〔注意〕

- 一、試験開始の指示があるまで問題を開いてはいけません。
- 二、問題冊子は17ページあります。試験開始後すぐに確かめてください。
- 三、解答はすべて解答用紙に記入してください。
- 四、問題冊子の表紙及び解答用紙に受験番号（算用数字）と氏名をはっきり書いてください。
- 五、字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。
- 六、試験終了後、解答用紙のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってください。
- 七、試験中、机の上から物を落としたり、気分が悪くなったり、何か用ができた時は、手をあげて監督かんとくの先生に知らせてください。

受験番号

氏名

東京女学館中学校

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ナツミとマキは小学校時代の同級生です。当時はとても仲が良かった二人ですが、中学受験の結果のことでトラブルがあり、二人の仲は疎遠そえんになってしまいます。高校一年生になった二人は、地元を走る路線バスの中で久しぶりに出会い、あれこれと話をしています。バスが通る交差点には、時折、通りがかりの人に「あなたの幸せを祈いのらせてください」と言っかけてくる人たちが何人か集まっています、二人はこれまでに何度か祈いのったり祈いのられたりする様子を見ることがありました。

バスが交差点を通り過ぎるとき、ナツミは窓の外に目を向けてみた。でも、その日は、祈いのったり祈いのられたりしている人たちはいないようだった。

ナツミは以前見た光景を思い浮かべてみようとした。祈いのる人たちもどこもなく弱々しげなところのある人たちだったが、祈いのってもらっている人たちも似たようなところがあったような気がする。マキちゃんの言うようにまったく無関係というのではないのかもしれない。

「あの人たち、幸せなんだろうか」

マキちゃんがひとりごとのように言った。

「どっちの人？」

ナツミは訊きき返した。

「祈いのる方の人たち」

「どうだろう。でもほんとに幸せだったらあんなことしないかもしれないね」

「じゃあ、不幸な人に幸せを祈いのってもらうっていうわけ？」

「よくわからないけど、そういうことになるのかな」

すると、マキちゃんが茶化ちやかすように言った。

「そんなことされたら不幸が乗りうつるんじゃないの」

ナツミはつい笑ってしまったが、祈る人も祈られる人も真剣しんけんなんだろうなと思った。どっちの人も幸せになりたいんだろうな。祈ったり祈られたりするだけで幸せになることができれば苦労はないのだろうけど……。

「あれって、もしかしたら、自分の不幸を相手に押しつけているのかもしれないよ」
マキちゃんがまじめな口調くちょうに戻もどって言った。

「そうかな……」

ナツミがあまりに相槌あいづちを打つと、マキちゃんが声を潜ひそめるようにして言った。

①「不幸の手紙と同じかもね」

「不幸の手紙？」

ナツミは驚おどろいて訊き返した。②「どうしてここで急に不幸の手紙が出てくるのだろう。」

「うん、不幸の手紙」

「メールじゃなくて？」

ナツミが確かめるように言った。

「不幸のメールだったら、簡単でいいじゃない。そのまま送り返すか、怪あやしいと思ったら開かないで削除すればいいんだから」

「それはそうかもしれないけど……」

「それに、メール・セメタリーっていうのもあるしね」

「なに、それ」

「セメタリーって墓地とかいう意味でしょ。不幸のメールが届いたら、そこに転送すると葬ほうむってくれるんだって。ほら、小学校のとき、一緒に近いっしょくの神社で古くなったお札を焼いてもらったことがあるじゃない」

そう言えば、大晦日おおみそかにマキちゃんのおじいさんとおばあさんに連れられて近いっしょくの神社に行ってお札を焼いてもらったことがあった。あのとき神社の人に飲ませてもらった甘酒あまざけで二人とも酔よっ払はらったようになってしまったっけ……。

「神主さんみたいに誰だれかがネット上でおはらいをしてくれるわけ？」

ナツミが言った。

「そうみたい」

「へえ」

「だから、不幸のメールはいいんだけど、不幸の手紙は困るんだよね。差出人は書いてないし、中身も読まないわけにいかないし」

ナツミはふと勘かんのようなものが働いた。

「もしかしたら、不幸の手紙、来たの？」

「うん」

それを聞いたナツミは、少し迷ったあとで言った。

「わたしのところにも、来た」

「うそ！」

「ほんと」

「いやね」

「とっってもいや」

ナツミは、昨日の夜、お父さんとお母さんの言い争いを耳にしたとき、わたしが不幸の手紙を出さなかったせいでこのまま離婚りこんなんていうことになったらどうしようかと不安を覚えたことを思い出した。そんなことになったら、きょうだいのいないわたしはどうしたらいいんだろう……。

「それって、最近のこと？」

マキちゃんが探るような口調で訊たずねてきた。

「うん、最近」

「こっちも最近」

互いにそう言い合うと、一拍いっぱく置いてから二人はほとんど同時に大きな声を上げた。

「ということは一！」

「とうことは！」

そして、マキちゃんが小さくうなずきながら言った。

「わたしたちの知り合いが出したのかもしれないね」

「そうかもしれない」

「小学校の同級生かな」

「たぶん、そうじゃないかな」

「誰だろう」

「誰だろう……」

ナツミに届いた不幸の手紙は間違いなく女の子が書いた字だった。ナツミは小学校のときの同級生の女の子を思い出そうとした。あんな手紙を出しそうな人といえは……。

考えていると、マキちゃんが訊ねてきた。

「誰かに出した？」

「出してない」

「出す？」

「うーん。出さないつもりだけど」

「でも、出さないと不幸になるって……」

「そんなのうそ、迷信よ」

ナツミが言うとマキちゃんが珍しく A を出した。

③「もし、ほんとに不幸なことが起きたらどうするの？」

そのとき、もしかしたら、自分のところに届いた不幸の手紙はマキちゃんが書いたのではないかという気がした。だから、最初にわたしの顔を見て、あんなに驚いたのかもしれない。

「ねえ、マキちゃん……」

ナツミがそれとなく訊ねようとすると、すぐ後ろの席に座っているおばあさんが声を掛けてきた。

「ちよつと、あなたたち」

「あつ、はい」

ナツミは返事をしながら、しまったと思った。少し大きな声でしゃべりすぎてしまったかもしれない。うるさいと注意されることになるのだろう。その前に、すみません、と謝ろうとしたが、おばあさんが口にしたのはまったく違うことだった。

「あなたたち、どうするつもり」

何を言われているかわからず、ナツミはマキちゃんと顔を見合わせた。

「不幸の手紙よ」

どうやら、おばあさんはこちらの話を聞いていたらしい。

「出さない」

二人が黙っていると、おばあさんは繰り返した。

「出した方がいいわよ」

「でも……」

ナツミが言いかけると、Bでおばあさんが言った。

「出さないとあとで後悔するようなことが起きるわよ」

すると、その横に座っていたおじいさんがおばあさんに向かって小さな声で言った。

「やめなさい」

「あなたは黙ってて！」

おばあさんが鋭い声ではねつけた。その声は静かなバスの中でことさら大きく響いた。

ナツミには乗客の全員がこちらに意識を向けたのがわかった。

「もしかしたら何も起きないかもしれない。でも万一起きたとき、後悔するわよ。出しておけばよかったって」
おばあさんが低い声で言い、ナツミはマキちゃんとまた顔を見合わせた。

「そんなこと、起きますか」

マキちゃんがいくらか体を斜めうしろに向けながら言った。

「子供を亡くした人がいるわ」

おばあさんがまったく抑揚のない調子で言った。

「手紙を出さなかったからよ」

「……………」

二人が黙っていると、おばあさんはひとりごとのようにつぶやき出した。

「ああ……出せばよかった……出していれば……あんなことは起こらなかったのに……言うことを聞いたばかりに……あなたは……わたしひとりでもできなかったのに……」

おじいさんがもういちどおばあさんに言った。

「やめなさい」

すると、おばあさんは急に気がついたような声の調子で訊き返した。

「何がですか?」

「もういいから」

「どうしてですか?」

「もういいから、やめなさい」

おじいさんの声に厳しい響きがこもったように聞こえた。おばあさんは、さっきとは違って、Cを出した。

「わたしは……ただこのお嬢さんたちに注意をしてあげているだけなのに……」

そして、それきり黙り込んでしまった。

バスの乗客が耳をそばだてているのがわかった。ナツミはマキちゃんとしやべるのをやめて、窓の外を見た。マキちゃんはカバンから携帯電話を取り出してメールをチェックしはじめた。

やがてうしろの席でおじいさんが手を伸ばして降車用のブザーを押す気配があり、バスが次の停留所で停まると立ち上がった。

おばあさんは、ナツミたちの席の横を通るとき、立ち止まって声を掛けた。

「出すのよ」

二人は黙って軽く頭を下げた。

バスが発車すると、マキちゃんが小さな声で訊ねてきた。

「手紙、いつきたの？」

「えーと、三日前」

「うちも三日前」

本当だろうか。もしそうだとしたらマキちゃんが出したのではないということになる。^④

「もう、時間がないよね」

マキちゃんが憂鬱^{ゆううつ}そうに言った。

「まあね」

「まあねって、明後日^{あさって}までに出不さなくちゃいけないんじゃない」

「どうして」

「あれって、五日以内に出さないといけないんですよ」

「五日以内？」

「五日以内に出さないと不幸になるって書いてあったでしょ」

「五日以内なんて書いてなかった」

「うそ」

「ほんと」

「じゃあ、なんて？」

「一週間以内に出させて」

「五日以内に三人に出せ、でしょ？」

「違うよ、一週間以内に五人に出すの」

そう言ったとき、ナツミは⑤すごく重要なことに気がついた。

「そうか、別の種類の不幸の手紙なんだ」

マキちゃんも D で言った。

「違う人から届いたんだ」

だとすれば自分のところに届いた不幸の手紙はマキちゃんが出したのではないということになる。マキちゃんの声が弾んで⑥いるのも、わたしが出したのではないとわかったからかもしれない。わたしが疑っていたのだからマキちゃんがそう思っていたとしても不思議ではない。

「いいなあ」

マキちゃんが羨ましそうに言った。

「何が」

「そっちは、一週間に五人でしょ、こっちは五日に三人だからたいへんだよ」

「どっちも、よくないよ」

⑥そう言いながら、ナツミは思っていた。出さなかったら本当に不幸が訪れるのだろうか。うしろに座っていたかわいそうなおばあさんのように。

でも、たぶんそうじゃない。あのおばあさんが不幸の手紙を出さなかったから子供が死んだんじゃない。出してもし出さなくても死んだに違いない。かわいそうだけど、その子はそういう運命だったのだ。

おばあさんがかわいそうなのは子供が死んでしまったからではない。もちろん子供に死なれるというのはとてもつらい経験だろう。でも、人が生きていく中で、大切な誰かを失うということは絶対にあることではないはずだ。おばあさんが本当にかわいそうなのは、子供が死んだのは自分が不幸の手紙を出さなかったからだと思っ⑦ていることだ。そうやって、いつまでも自分を責めていることだ。誰が出したか知らないけれど、自分がどれほどひどいことをしたかわかっているのだろうか。

もし自分が五人に出すとすれば、その人たちを⑦あのおばあさんと同じような悲しい目にあわせてしまうことになるかもしれない

い。

やめよう、とナツミは思った。わたしは出すのをやめよう。たとえば、お父さんとお母さんが離婚するようなことになっても、期末試験の結果が絶望的なものになっても、それ以外に思いもよらないような不幸に見舞われても、それを不幸の手紙のせいにするのはよそう。不幸の手紙を出さなかったからだなんて決して思わない。それはそうなる理由があっただけなのだ……。

気がつくと、次はナツミが降りる停留所だった。慌てて窓の横についている降車用のブザーを押した。マキちゃんはその次の停留所で降りるはずだった。

バスが停まると、通路側に座っているマキちゃんが席を立ってくれた。ナツミが出やすいようにしてくれたのだろうと思っていると、小さな声で言った。

「わたしも降りる」

⑧ どうしてかナツミには理由がわからなかった。

開いた降車用のドアからまずマキちゃんが降り、続いてナツミが降りた。

マキちゃんは降りたところに立ち止まり、バスが発車していくと、きっぱりとした口調で言った。

「わたし、出さない」

それを聞いてナツミは嬉しくなくなった。そして、マキちゃんと同じようにきっぱりと言った。

「わたしも、出さない」

二人は顔を見合わせると、少し照れたように笑い合った。

「じゃあね」

マキちゃんはそう言って、次の停留所の方へ向かって歩きはじめた。

「じゃあね」

ナツミもそう言って、反対の方向に歩き出した。

歩きながら、ナツミは自分の気持ちが明るくなっていくのがわかった。そして、こう思った。⑨ わたしたちは背中を向けて反対の方向に歩いているけれど、小学生のとき一緒に神社に行ったときのように手をつないで歩いているような気がする。ナツミに

はなんとなくそのときのマキちゃんの手のひらの感触が思い出せそうな気がした。

マキちゃん、大丈夫。不幸なんて、きつと来ないから。ナツミは心の中でつぶやいた。

⑩ バス通りを渡るため横断歩道の信号が変わるのを待っていると、向こう側の歩道の脇に郵便ポストが立っているのが見えた。

カバンを左手に持ち替えたナツミは、右手でピストルのかたちを作った。そして、人差し指の銃口を赤いポストに向けると、狙いを定めて声の銃弾を発射した。

「ダーン！」

(沢木耕太郎「銃を撃つ」より)

※出題の都合上、一部表記のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。

問一 —— 線① 「不幸の手紙と同じかもね」とありますが、マキはどのような点が「同じ」だと考えていますか。「く点」に続くように本文中からそのまま抜き出して答えなさい。

問二 —— 線② 「どうしてここで急に不幸の手紙が出てくるのだろう」とありますが、マキが「不幸の手紙」を話題に出した理由を十五字以内で答えなさい。

問三 —— 線③ 「そのとき、もしかしたら、自分のところに届いた不幸の手紙はマキちゃんを書いたのではないかという気がした」とありますが、ナツミがこのように感じた理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 小学校時代のマキは少し意地悪で自分勝手な性格だったこと思い出したから。

イ 久しぶりに会ったときのマキの顔が驚いたものであったことを思い出したから。

ウ 自分もマキに書くかと思ったので、マキも同じように自分に書くかと思ったから。

エ マキが出さないと不幸になることを心配していたのでやりかねないと思ったから。

問四 — 線④ 「マキちゃんが出したのではないということになる」とありますが、このように考えられる理由を二十五字以内で説明しなさい。

問五 — 線⑤ 「すごく重要なこと」とありますが、この内容が具体的に述べられている部分を本文中から三十五字以内でそのまま抜き出し、初めと終わりの五字を答えなさい。

問六 — 線⑥ 「ナツミは思っていた」とありますが、ナツミが「思っていた」ことが述べられている部分の終わりはどこになりますか。最後の五字を本文中からそのまま抜き出して答えなさい。

問七 — 線⑦ 「あのおばあさんと同じような悲しい目」とありますが、「悲しい目」の内容を本文中の言葉を用いて五十字以内で答えなさい。

問八 — 線⑧ 「どうしてかナツミには理由がわからなかった」とありますが、マキが一つ手前の停留所で降りた理由を自分で考えて答えなさい。

問九 — 線⑨ 「わたしたちは背中を向けて反対の方向に歩いているけれど、小学生のとき一緒に神社に行ったときのように手をつないで歩いているような気がする」とありますが、ナツミがこのように感じる理由を四十字以内で答えなさい。

問十 — 線⑩ 「カバンを左手に持ち替えたナツミは、右手でピストルのかたちを作った。そして、人差し指の銃口を赤いポストに向けて、狙いを定めて声の銃弾を発射した」とありますが、ポストに向けて銃を撃つというナツミの行動は、彼女のどのような気持ちを表したものだと考えられますか。二十字以内で答えなさい。

問十一 本文中の〔A〕〔D〕に適する語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号をくり返し
用いてはなりません。

ア 脅^{おび}えたような声

イ 自信のなさそうな声

ウ 異^い様^{よう}に低い声

エ 弾^{はず}んだ声

二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「科学には限界があるかどうか」という質問をしばしば受ける。科学が自分自身の方法にしたがって確実なそして有用な知識を絶え間なく増加し、人類のために膨大かつ永続的な共有財産を蓄積しつつあるのを見ると、科学によってすべての問題が解決される可能性を、将来に期待してもよさそうに思われる。しかしまたその反面において人間のさまざまな活動のある部分が、ある方向に発展していった結果として、今日科学といわれるものができ上がったこと、A つねに科学と多かれ少なかれ独立する他の種類の他の方向に向かつての人間活動が存在し、それらと科学とがある場合には提携し、ある場合には背馳しつつ発展するものであること、現在の科学者にとってまだ多くの未知の領域が残っていることなどを考慮すると、① 素朴な科学万能論を信ずることはできないのである。

大多数の人は、恐らく何等かの意味において漠然とした科学の限界を予想しているに違いないのであるが、② この問題に多少なりとも具体的な解答を与えようとすると、まず科学に対するはつきりした定義を与えることが必要になってくる。B それは決して容易でなく、どんな定義に対してもいろいろな異論が起り得るのである。しかし科学の本質的な部分が事実の確認と、諸事実の間の関連を表わす法則の定立にあることだけは何人も認めるであろう。事実とは何か、法則とは何かという段になると、また意見の違いを生ずるであろう。しかしいずれにしても、とにかく事実という以上は一人の人の個人的体験であるにとどまらず、同時に他の人々の感覚によっても捕え得るという意味における客観性を持たねばならぬ。したがって自分だけにしか見えな^③い夢や幻覚などは、④ 一応「事実」でないとして除外されるであろう。C 心理学などにとっては、夢や幻覚でも研究対象になり得るが、その場合にもやはり、体験内容が言葉その他の方法で表現ないし記録されることによっては、広い意味での事実にも客観化されることが必要であろう。この辺までくると、科学と文学との境目は、もはやはっきりとはきめられない。自己の体験の忠実な表現は、D 文学の本領だともいえるであろう。⑤

それが科学の対象としての価値を持ち得るためには、体験の中から引出され客観化された多くの事実を相互に比較することによって、共通性ないし差違が見出され、法則の定立にまで発展する可能性がなければならぬ。赤とか青とかいう私の感じは、そのままでは他の人の感じと比較のしようがない。物理学の発達に伴って、色の感じの違いが、光の波長の違いにまで抽象化さ

れ客観化されることによつて、はじめて色や光に関する一般的な法則が把握はあくされることになるのである。その反面においてしかし、私自身にとつて最も生き生きとした体験の内容であつた赤とか青とかという色の感じそのものは、この抽象化の過程とちゅうの途中で脱落だつらくしてしまうことを免れないのである。科学的知識がますます豊富となり、正確となつていく代償だいしょうとして、私どもにとつて別の意味で極めて貴重なものが、随分ずいぶんたくさん科学の網目あみめからまれていくのを如何いかんともできないのである。科学が進歩するにしたがつて、芸術の種類や形態にも著しい変化が起るであろう。しかし芸術的価値の本質は、つねに科学の網⑦によつて捕らえられないところ⑧にしか見出されないであろう。

一言にしていえば、私どもの体験には必ず他と比較したり、客観化したりすることのできない絶対的なものが含まれている。人間の自覚ということ自体がその最も著しい例である。哲学てつがくや宗教の根⑧がここにある以上、上記のごとき意味における科学が完全にそれらに取つて代わることは不可能であろう。科学の適用される領域はいくらでも広がつてゆくであろう。このいわば遠心的な方面には恐らく限界を見出し得ないかも知れない。それは哲学や宗教にも著しい影響えいきやうを及ぼすであろう。しかし、科学が自己発展を続けてゆくためには、その出発点において、またその途中において、故意に、もしくは気づかずに、多くの大切なものを見のがすほかなかつたのである。このような科学の宿命をその限界とよぶべきであるならば、それは科学の弱点であるよりもむしろ長所であるかも知れない。なぜかといへば、この点を反省することによつて、科学は人間の他の諸活動と相補いつつ、人類の全面的な進歩向上に、より一層大きな貢献こうけんをなし得ることになるからである。

(湯川秀樹『湯川秀樹 詩と科学』より)

※出題の都合上、一部表記のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。

問一 本文中の A D にあてはまる最も適当な語を次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア したがつて イ 最も ウ むしろ エ なぜなら オ ところが

問二 — 線① 「素朴そぼくな科学万能論」とありますが、これはどのような考え方ですか。「〜という考え方」に続くように、本文中から二十字以内でそのまま抜き出して答えなさい。

問三 — 線② 「この問題」とありますが、これはどのような問題ですか。「〜という問題」に続くように、本文中から十五字以内でそのまま抜き出して答えなさい。

問四 — 線③ 「何人も」とありますが、

(1) 「何人」の読み方を平仮名で答えなさい。

(2) ここでの意味を五字以内で答えなさい。

問五 — 線④ 「一応『事実』でない」とありますが、なぜ「『事実』」とは言えないのですか。その理由を本文中の語を用いて十字以内で答えなさい。

問六 — 線⑤ 「それ」とありますが、

(1) この語が指し示す内容を本文中から五字でそのまま抜き出して答えなさい。

(2) 「それ」の具体的な例として挙げられている事柄を二つ、本文中から十五字以内でそのまま抜き出して答えなさい。

問七 — 線⑥ 「別の意味で極めて貴重なもの」とありますが、この「貴重なもの」にあてはまるものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 大きな虹を見て美しいと感じる感性。
- イ 虹は太陽の光が原因でかかるという知識。
- ウ 虹は雨上がりの空にかかるという事実。
- エ なぜ虹が半円状にかかるのかという理由。

問八 — 線⑦ 「科学の網によって捕らえられない」とありますが、「科学の網によって捕らえ」るとは、どのようなことを意味していますか。本文中から二十字以内でそのまま抜き出し、初めと終わりの五字を答えなさい。

問九 — 線⑧ 「ここ」とありますが、この語が指し示す事柄を、本文中の語を用いて四十字以内で答えなさい。

問十 — 線⑨ 「上記のごとき意味における科学」とありますが、「上記のごとき意味」とはどのような意味ですか。この意味として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 科学は、さまざまな芸術の本質を客観的にとらえることができるという意味。
- イ 科学は、ある体験を他の体験と比較して客観的に考えるものであるという意味。
- ウ 科学は、人間の体験のすべてをその対象とすることはできないという意味。
- エ 科学は、芸術の種類や形態に著しい変化をもたらすものではないという意味。

問十一 本文の内容に合致するものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 近年は、科学の進歩によって、科学と文学などの芸術との境目がはっきりしなくなってきた。
- イ 科学の進歩には、ある意味限界がないが、科学ではとらえきれないものがあるという限界は存在する。
- ウ 夢や幻覚は、それを見ている人にとっての個人的な体験なので、科学の対象にはなりえないと考えられる。
- エ 赤や青の色を美しいと感じることは、色を光の波長として客観化することで科学的に扱うことができる。

三次の——線部のカタカナを正しい漢字に直しなさい。

- 1 キボの大きな工事。
- 2 交通安全のヒヨウゴを考える。
- 3 にわとりにシリヨウを食べさせる。
- 4 期待にコタえて活躍する。かつやく
- 5 実験ソウチを組み立てる。
- 6 ソツセンして行動する。
- 7 サイキを期する。
- 8 世間のフウチヨウが変わる。
- 9 万全の体調で試合にノゾむ。
- 10 口げんかでアクタイをつく。

令和三年度入学試験 二月三日実施

東京女学館中学校



国語解答用紙

(字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。)

一問一 点。

問二 問三

問四

問五 問六

問七

問八

問九

問十

問十一

二問一 A B C D

問二

問三

問四

問五

問六 (1)

問七 (1)

問八 (2)

問九 (1)

問十 (2)

問十一

問十二

問十三

問十四

問十五

問十六

問十七

問十八

問十九

問二十

9	5	1
む		
10	6	2
	7	3
	8	4
		えて

評	点

という考え方。

という問題。



受験番号

氏名